己未両節　美濃関

六七の春を迎て相生されの
無事を新に

書そめや年始ばかりも滞り寸　古信祢　己省

事繁を砂走の市中に

隙なき年も何れも年の宮を忘れ、

取来の算いつしか縦心の柳絲
もしまた自然ふくなる

老らくや七十に鰭の少し男　木犀庵　土龍

常いなつらひ　隠者に似たれども

債を小路ゆしとりてまゐし兎、

同じく有り白に無して

明る吟をぬ行にまへすゆ神叩、

京　橋治梓刀